2011 年 10 月 25 日

報道関係各位

～中高生と母親　約 2,000 名の意識調査より～

“青春のハードル”ニキビの悩み　親子間で約 2 倍の差

中高生　病院未受診者の半数が「病院に行きたいが、親に言いにくい」

ニキビの疾患啓発に取り組む、ガルデルマ株式会社（本社：東京都新宿区、代表取締役：ウンベルト・C・アントゥネス）と塩野義製薬株式会社（本社：大阪市中央区、代表取締役社長：手代木功）は、中高生と中高生の子どもをもつ母親を対象に、ニキビに関する意識についてインターネット調査を実施し、両者の意識の違いなどについて検討しました。※1
なお、アンケート回答者数は、中高生 930 名、母親 1,000 名でした。

日本人の 9 割以上が一度は経験すると言われているニキビは、単なる「肌のトラブル」「青春のシンボル」などと考えられがちですが、「尋常性ざ瘡」と呼ばれる皮膚の慢性疾患です。※2　ニキビは、主に思春期から顔面に現れ、放っておくと瘢痕（はんこん；ニキビ痕）が残ることもあり、患者さんにとっては、QOL（生活の質）に深刻な影響を与えることもある疾患です。特に外見を気にしがちな思春期の子どもたちにとっては、心理面への影響も大きく、自信や前向きな姿勢を阻む“青春のハードル”とも言えます。患者さん本人と家族には、ニキビが皮膚疾患であるという認識と適切な治療に関する正しい理解が求められます。

ガルデルマと塩野義製薬は、このような状況を踏まえ、中高生のニキビ患者さんと母親世代のニキビに関する意識や悩みの深さ・実態を把握し、ニキビの原因や適切な対処法の啓発を行うことを目的に今回の調査を行いました。その結果、主に次のことがわかりました。

※1　今回調査を実施した対象は、血縁/同居の関係を持たない中高生と母親であり、中高生一般の意識と中高生の子どもを持つ母親一般の意識を比較した結果です。
※2　宮地良樹編集『ニキビ最前線』（メディカルレビュー社、2006 年）

≪調査結果概要≫　＊データ詳細　別紙ご参照

1. “ニキビの悩み”　親子間で約 2 倍の差

ニキビにより「恥ずかしい」「自信がもてない」と感じている子どもはいずれも 35%以上で、母親の想像よりも約 2 倍も多いという結果でした。
さらに、母親の 54.2%が子どものニキビについて「特に心配は無い」と思っており、ニキビに対する悩みについて、子どもと母親の間にギャップがある傾向が伺えます**【グラフ①】**。

2. 軽症のニキビでも、悩みは深い

ニキビについて悩んでいると回答した子供の割合は 52.2%でした。
重症度分類でみると、重症が最も高く 87.6%でしたが、たとえ面ぽう主体か軽症のニキビであっても約半数がニキビに悩んでいました。このことから、症状に関わらずニキビは思春期の子どもの心理面にマイナスの影響を及ぼすといえます**【グラフ②】**。

3. 親が知らない子の悩み

①ニキビで“嫌な思い”　中高生の 7 人に 1 人が経験

ニキビにより「嫌な思い/経験」がある子どもは 7 人に 1 人（14%）でした。具体的には、「にきびの数を数えられた」、「『お前、顔洗っているのか？』と馬鹿にされた」、「高校受験の際、面接で良くない印象を持たれないか心配だった」、「ニキビがあることで、“ぶつぶつ”、“ニキビ女”などあだなをつけられた」「“汚い”とからかわれたりした」など、精神的な悩みにつながる経験を持つ実態が明らかになりました。

②ニキビが原因でイジメにあった経験のある子どもは 930 人中 21 人

ニキビが原因で過去にいじめられたり、現在いじめられている子どもは、今回の調査対象 930 人中 21 人（2.3%）でした。一方、子どもがニキビでいじめられた経験があることを認知している母

親はわずかに 0.4%でした。今回の調査対象は子どもと母親は独立した集団で親子関係はありませんが、ニキビが原因で子どもが悩んでいることを母親は把握できていない状況が示唆される結果となりました。

4. ニキビ治療受診のタイミングは遅く、“ひどくなったら”が最多

病院でのニキビ治療の認知は子ども・母親ともに8割以上でした。（子ども83.7%, 母親92.2%）
しかし実際に、母親が子どもに勧めるニキビケアは洗顔、ニキビ用化粧品、生活習慣の改善（食事・睡眠など）が主な内容でした**【グラフ③】**。
病院でニキビ治療を受けるタイミングについては、子ども・母親ともに「赤いニキビがひどくなったら」が最も多く、特に子どもは「ニキビ痕が目立ったら」の回答が 19%を占め、ニキビが重症化してから、病院で治療を受ける患者さんの行動が浮き彫りになりました**【グラフ④】**。

5. 「病院に行きたい」と親に言いにくい 未受診の子どもの半数

また、病院でのニキビ治療について、病院未受診の子どもの半数が「お金がかかるので、親に言い出しにくい」と回答しています**【グラフ⑤】**。
さらに病院でニキビ治療の経験については、約 1/4 にあたる 24.1%が「行ったことはないが、行きたいと思っている」と回答したことから、ニキビに悩みながらも病院受診を親に言い出せずにいる子どもの様子が伺えます**【グラフ⑥】**。

6. ニキビの改善が最も高いのは親子ともに「病院での治療」。「医師からのアドバイス」を高く評価

ニキビの治療を皮膚科で受けたことがある/現在も行っている人は子ども 21.6%、母親（子どものニキビ治療のため、病院に行ったことがある/現在も行っている人）24.0%で**【グラフ⑥】**、症状が「改善した」と回答しているのは子ども55.6%、母親 31.9%と、他の対処法と比較して高い比率でした**【グラフ⑦】**。
また、病院でニキビ治療を受けた感想として、「早く治った」「肌がきれいになった」などニキビの症状改善のほか、子ども・母親ともに「医師からのアドバイス」を高く評価しています**【グラフ⑧】**。

ニキビ治療に熱心に取り組み、数多くの患者さんを診察されている、虎の門病院 皮膚科部長 林 伸和先生は、今回の調査結果を受けて、以下のように述べておられます。

「ニキビは『青春のシンボル』と言われますが、医学的には『尋常性ざ瘡』という慢性の皮膚疾患です。顔のニキビは、周囲が考える以上に患者本人が受ける精神的影響が大きいため、母親（保護者）の正しい理解と子どもへの皮膚科受診の後押しが必要です。また、ニキビ痕を残さないためにも、ニキビ 1 個からでも早めに治療することが大切です」

今回の調査結果を踏まえ、両社は、ニキビを罹患した患者さんに正しい情報を伝え、適切なタイミングでの皮膚科医受診、さらには QOL の改善・向上を実現すべく、引き続き啓発活動に取り組んで参ります。

以上

調 査 結 果

≪調査概要≫

調査目的:　ニキビに関する意識や、悩みの深さ・実態を把握し、ニキビの原因や適切な対処法の啓発に寄与する

調査時期:　2011 年 8 月 12 日～8 月 26 日

調査対象:　子ども:顔にニキビのある中学生・高校生　930 人
　　母親:顔にニキビのある中学生・高校生の子どもを持つ母親　1,000 人

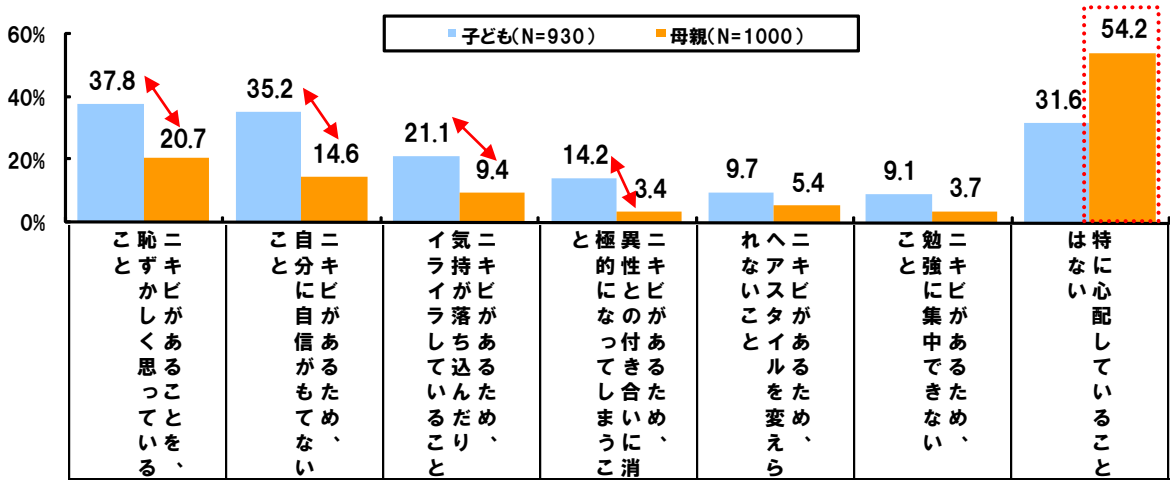
調査エリア:　全国

調査方法:　インターネット調査

※今回調査を実施した対象は、血縁/同居の関係を持たない中高生と母親であり、中高生一般の意識と 中高生の子どもを持つ母親一般の意識を比較した結果です。

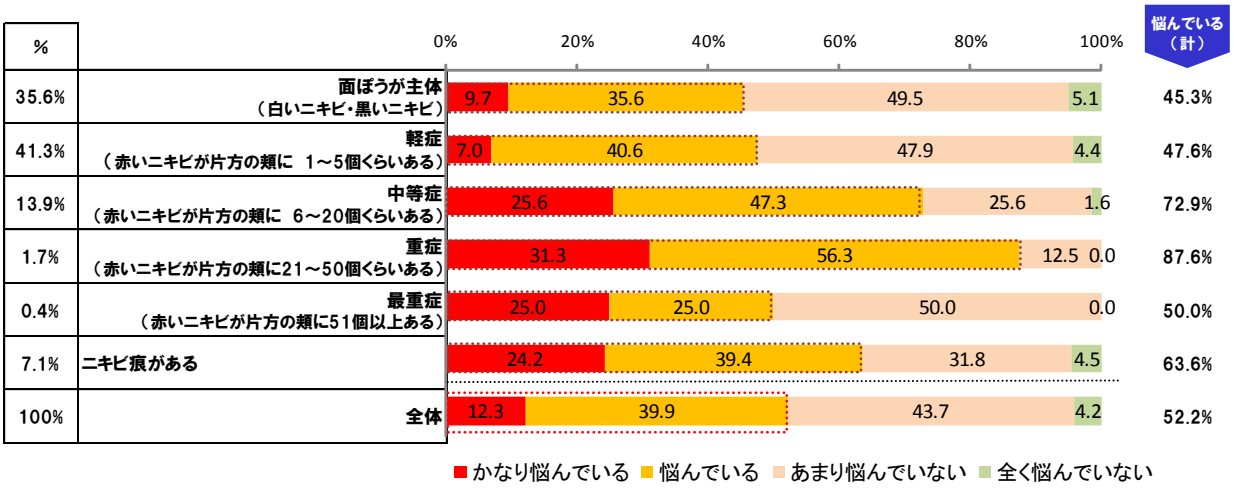
グラフ①　【子ども】Q.ニキビがあることで、あなたにあてはまること・あなたが経験したことを以下から全て選んでください。(いくつでも)

【母 親】Q.あなたのお子さんのニキビについて、あなたはどのようなことが心配ですか。あてはまるものを以下から全て選んでください。(いくつでも)



回答対象者:全回答者(子ども・母親ともに)

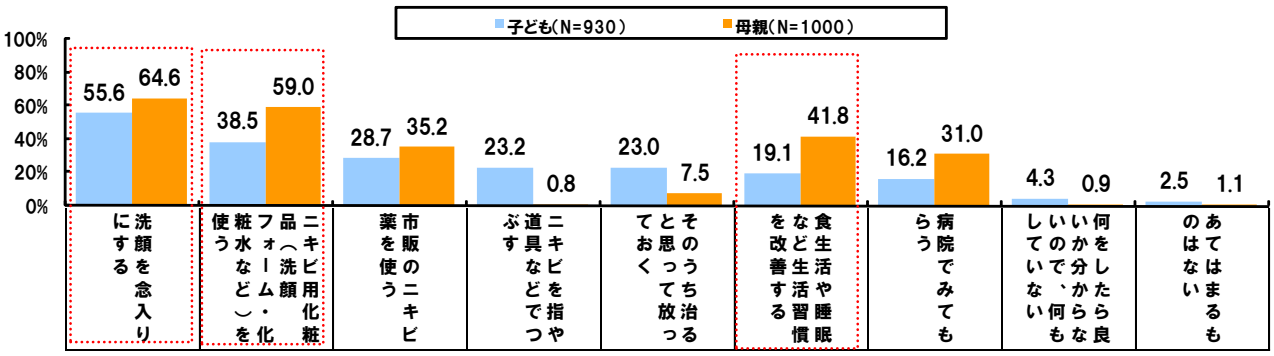
グラフ②　【子ども】Q. あなたは、ニキビについてどのくらい悩んでいますか。
Q. あなたの今のニキビの状態に近いものを下記の中からひとつだけ選んでください。



回答対象者:子ども全回答者 N=930

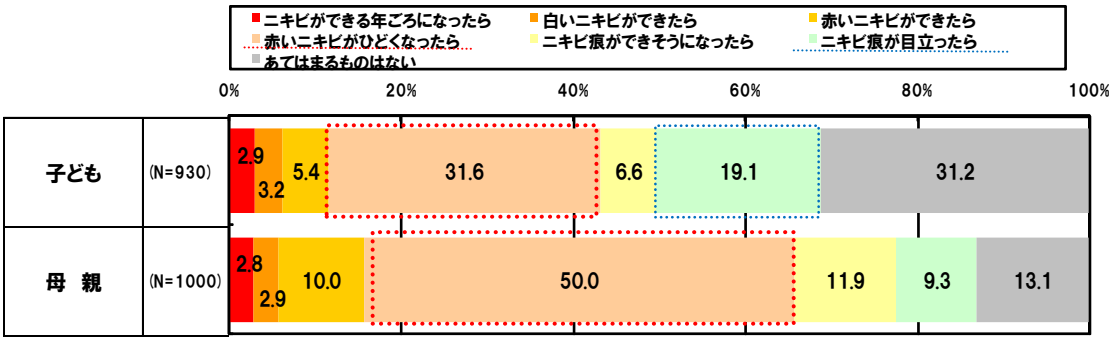
グラフ③ 【子ども】Q. ニキビができた時、あなたはどのように対応していますか（対応しましたか）。
あてはまるものを以下から全て選んでください。（いくつでも）

【母 親】Q. お子さん（第一子）にニキビができた時、あなたはどのように対応していますか
（対応しましたか）。あてはまるものを以下から全て選んでください。（いくつでも）



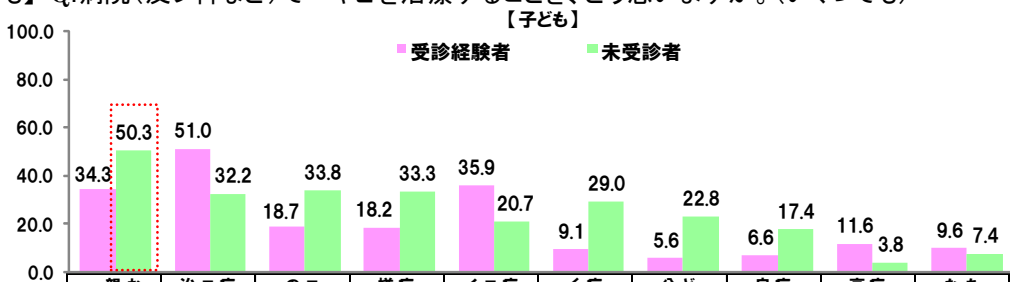
回答対象者：全回答者（子ども・母親ともに）

グラフ④ 【子ども】Q.ニキビがどのような状態になったら、病院（皮フ科など）に行きますか。
【母 親】Q.お子さんのニキビがどのような状態になったら、病院（皮フ科など）に行きますか。



回答対象者：全回答者（子ども・母親ともに）

グラフ⑤ 【子ども】Q.病院（皮フ科など）でニキビを治療することを、どう思いますか。（いくつでも）

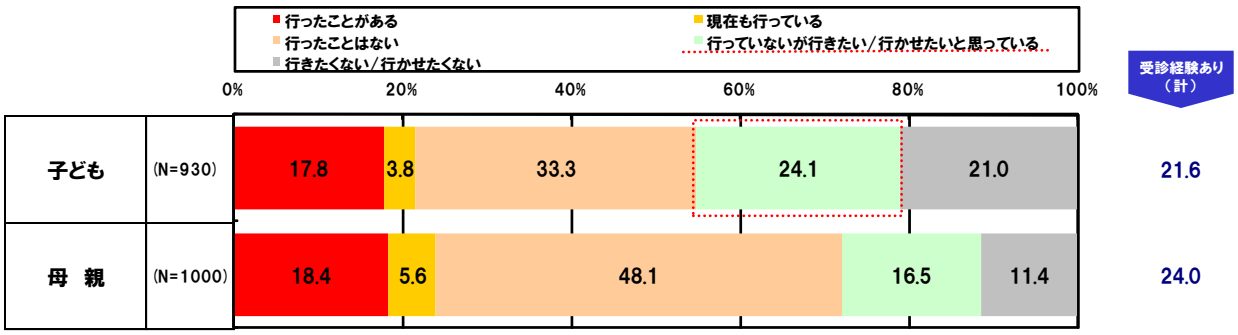


		(n=)	お金がかかるので、親に言い出しにくい【子ども】	病院に行けば、ニキビはきちんと治る	ニキビで病院に行くのは大げさだ	病院に行くことは嫌だ	病院の先生がニキビケアのアドバイスをしてくれる	病院に通うのは面倒くさい	どんな治療をするか分からず不安	病院に行っても良い薬はないと思う	病院の薬や治療費は高い	あてはまるものはない
受診状況	全体	(778)	46.3	37.0	29.9	29.4	24.6	23.9	18.4	14.7	5.8	8.0
	【受診経験者】	(198)	34.3	51.0	18.7	18.2	35.9	9.1	5.6	6.6	11.6	9.6
	【未受診者】	(580)	50.3	32.2	33.8	33.3	20.7	29.0	22.8	17.4	3.8	7.4

※受診経験者：ニキビ治療のため病院（皮フ科など）に行ったことがある、現在も行っている
未受診者：ニキビ治療のため病院（皮フ科など）に行ったことはない、行ってないが行きたいと思う、行きたくない

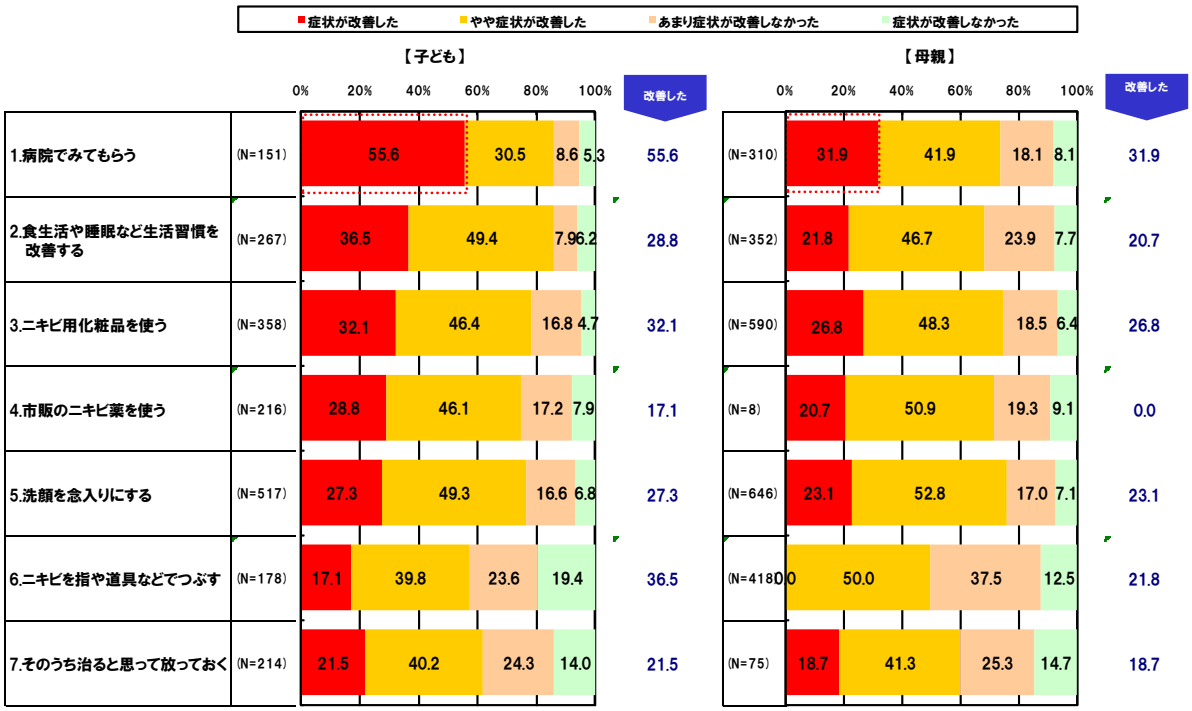
回答対象者：病院でニキビ治療を受けられることを知っている、子どもの回答者

グラフ⑥ 【子ども】Q.ニキビ治療のため、実際に病院（皮フ科など）に行ったことがありますか。（いくつでも）
【 母 親 】Q.お子さんはニキビ治療のため、実際に病院（皮フ科など）に行ったことがありますか。



回答対象者：全回答者（子ども・母親ともに）

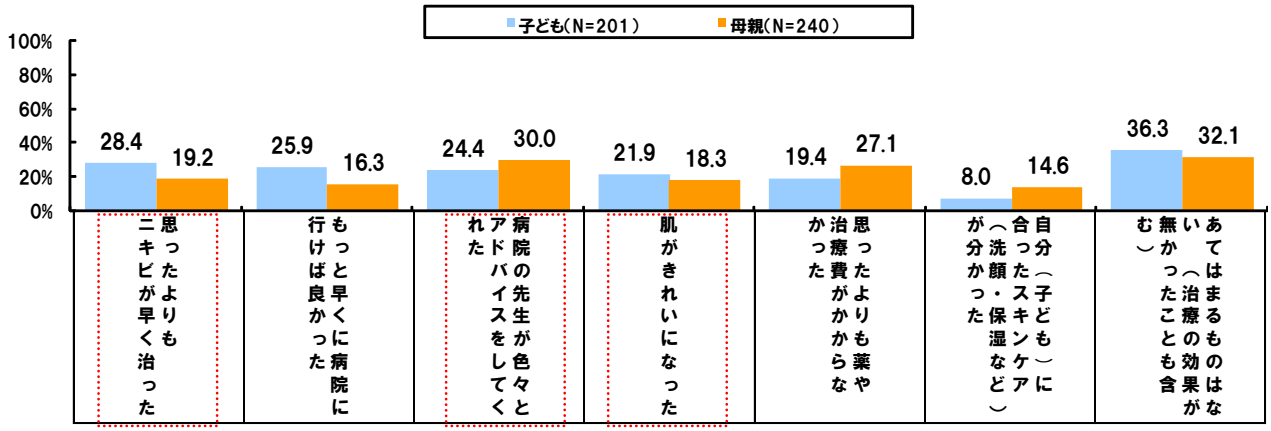
グラフ⑦
【子ども】Q.あなたが行ったニキビの対処法について、症状が改善したと感じたものはありますか。
【 母 親 】Q.あなたが勧めた、お子さんのニキビへの対処法について、症状が改善したと感じたものはあります



回答対象者：子ども：ニキビに対して、何らかの対処をおこなっている回答者（n=867）
母　親：子どものニキビに対して、何らかの対処法を勧めている回答者（n=980）

グラフ⑧ 【子ども】Q. 病院（皮フ科など）で、ニキビを治療中の／治療したあなたの感想としてあてはまるものを以下から全て選んでください。（いくつでも）

【母 親】Q. 病院（皮フ科など）で、お子さん（第一子）がニキビを治療中の／治療したあなたの感想としてあてはまるものを以下から全て選んでください。（いくつでも）



回答対象者：子ども：ニキビ治療のため、病院受診経験のある回答者（n=201）
母　親：子どものニキビ治療のため、病院受診経験のある回答者（n=240）

■ ガルデルマ株式会社について

ガルデルマ社は、世界最大の食品会社ネスレ（スイス）と世界最大の化粧品会社ロレアルグループ（フランス）の 50%：50%出資のジョイントベンチャーと して 1981 年に誕生した、皮膚科学専門のグローバル医薬品企業です。現在、世界で 3,200 名以上が勤務し、70 カ国以上で製品を販売しています。

世界的には、ニキビ、酒さ、爪白癬、乾癬・ステロイド反応性疾患（ステロイドが著効を示す皮膚疾患）、色素異常を中心とした皮膚疾患に対するソリューションを広く提供し、すべての方の皮膚の健康向上に貢献すべく、事業展開を行っております。

また、革新的な製品を生み出すために、皮膚科学に特化した研究施設としては世界最大規模である、ソフィア・アンテポリス（フランス）研究開発センターを拠点とした研究活動が行われています。

2010 年には、全世界で 12 億 350 万ユーロの売上（前年比 16.1%増）を計上し、研究開発に売り上げの約 20%投資しています。ガルデルマ株式会社は、ガルデルマ社の 100%出資の日本法人として 1996 年に設立されました。

■ 塩野義製薬株式会社について

シオノギは、「常に人々の健康を守るために必要な最もよい薬を提供する」という基本方針のもと、創薬研究開発型企業として、世界中の患者さまやご家族の方々の QOL（Quality of Life：生活の質）向上を実現するために、より一層満足度の高い医薬品をお届けすることをミッションとして、医療用医薬品を中心に、OTC 医薬品や診断薬の研究開発、製造、販売活動を行っています。

第 3 次中期経営計画（2010 年 4 月～2015 年 3 月）におきましては、「SONG for the Real Growth」のスローガンのもと、グローバルに本格的な成長を目指して、グループ一丸となって邁進してまいります。

＜各会社へのお問い合わせ先＞

ガルデルマ株式会社
マーケティング本部
TEL：03-5229-6955
FAX：03-5299-6903

塩野義製薬株式会社
広報部
大阪 TEL：06-6209-7885
FAX：06-6229-9596
東京 TEL：03-3406-8164
FAX：03-3406-8099

＜本件に関するお問い合わせ先＞

フライシュマン・ヒラード・ジャパン株式会社　担当：後藤/秋元
TEL 03-6204-4335 FAX 03-6204-4302